

自分を信じて、自分らしく

高松市立桜町中学校 一年 直井 胡帆

何で自分はヨットを始めたのだろう。

私は、史上最年少でヨット単独無寄港世界一周を果たした白石康次郎さんの生き方を知り、また、海で経験したことを通して、その答えが少し見えたような気がした。

私が家族に強くさそわれてヨットハーバーに行ったのは、今から三年前である。最初は陸でヨットの乗り方や簡単なルールを教えてもらっていた。暑い夏、海際でみんな水をかけ合ったり、飛びこんだりすることが楽しかった。しばらく通ううちに、私にもヨットに乗る番が来た。普通の船と違って、このOPというヨットは、風の強弱で船を操作し、風が強いと操縦不能になり、沈（沈没）してしまう船である。そして、沈没すると、自力で船を起こさなければならぬ。小学四年生の夏、初めて乗った時のことは、今でも鮮明に覚えている。それまでは、友達と一緒に水をかけ合い、はしゃいでいた大好きな海が、一瞬で怖くなった。広い海の上で一人で乗せられて出艇していくと、そこからは孤独である。風の方向も分からないので、帆を風に合わせる事ができない。もちろん、かじもどのようにきつてよいか分からなく、怖くて下を向いたまま動けなくなった。涙がぼろぼろとこぼれた。そんな日々が何日も続き、毎回泣いてばかりだった。

ある日のことだった。女性のコーチと一緒に乗ってくれたのだ。泣いている私に、「大丈夫、私も最初はそうだったよ。」と励ましてくれた。それがうれしくて、何より心強かった。私だけではないのだと思うと、少しずつ力が湧いてきた。そして、だんだんとハーバーに行く日曜日が待ち遠しくなってきた。すると、友達もたくさんできるようになり、陸に戻ってからの一時間のミーティングに参加するようになった。また、昼休みに先輩が細かい動きを教えてくれることがうれしくもあった。今日のセーリングのふり返りや、知らないルールをノートに書いて見直したり、実際に海に出て試してみたりして、自分でどうしたら速くはしれるようになるかを考えるようになった。

あの白石さんでさえ、「初めての海は絶望的なまですらなかった」と言っている。私も同じ体験ができたことに、今は感謝している。それに、白石さんは、「立ちほだかる壁からは逃げられない」という言葉も残している。

ある日、強風の中、初めて船が沈没した。自分も海の中に落ちた。必死に船を起こそうとしたが力がなく、息をするため海面に出ようともがいたが、自分の船に頭が当たって海面に顔を出せなかった。やっとの思いで顔を上げ、「助けて」と力をふり絞ってさげんだ。手を伸ばそうとした時だった。目の前で見守ってくれていたレスキューボートのコーチは、「も

う大丈夫やな。もっと大変な人がいるから助けに行く。」と言い、その場を去った。私は、震える手にもう一度力を込め、自分で船を起こした。厳冬の際は、風と白波で荒れていた。向こうが見えなかった。寒かった。冷たかった。本当に死ぬかと思った。

そんな経験をした後、まだ小学生だった私は、友達と思いが通じ合わず、悩んだ時期があった。そんな私に母が、「今とても苦しいよね。でも、あの寒い冬の海で、胡帆は一人であるの船を起こすことができた。だから、時間がかかってもいい。ゆっくりでもいい。自分でこのことを越えていくことができるはずだよ。」と、励ましてくれた。今、私はその壁を乗り越えつつある。目の前にある壁からは決して逃げられないこと、そして壁に立ち向かう勇氣の大切さを、私は海から学んだ。

白石さんの生き方の根底には、「しんどい思いをしなければ、精神筋肉はきたえられない」という考え方ががある。今の世の中は、子どもたちにメンタル的な負荷を与えることが少ない仕組みになっているそうだ。「つらい、しんどい」思いをすることの意味を、私は、ヨットの経験から考えてみた。

あの日のような沈没は、その後も何度も経験した。あの冬の海の経験があるからこそ、今の私がある。私の手は、いつも海水でかぶれ、指先から血が出てくる。それに、足の裏は、全面ひび割れている。痛くて、手足を人に見られるのもつらいので、学校では、だれにも気づかれないようにしている。この辛抱にも近頃は少し慣れてきた。

最近出るようになったレースでは、人との戦いであり、自分との戦いでもあるという感覚が芽生えてきた。スタートラインに並ぶと、心臓が破裂しそうに高鳴る。そんな自分と正面から向き合い、挑んだ全中のレース。そこで、私は、優勝することができた。だから、私は、つらさからもしんどさからも、そして自分自身からも逃げたくない。それが、私らしい生き方だと感じるからだ。

白石さんの生き方や自分自身の海での経験が教えてくれたように、私は、海の上で自分で決めたことに向き合い、進んでいきたい。これからもいろいろな失敗をするだろう。自分にも相手にも負けて悔しい思いもするかもしれない。けれど、いつか必ず自分の風が吹いてくると信じていたい。そして、その日のために、自分の技も心も磨き続けていきたい。いつか吹いてくるであろうその風をつかみ、風に乗って自分らしく進んでいきたい。